

Title	3歳児が幼稚園生活に適応するプロセス II : 事例を通してみる適応の姿
Author(s)	相川, 徳孝
Citation	聖学院大学論叢, 13(1): 1-19
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=502
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

3歳児が幼稚園生活に適應するプロセス II

—事例を通して見る適應の姿—

相川 徳孝

The Process of Three-year-old Children Adjusting to Kindergarten II

Noritaka AIKAWA

This research aims to clarify the process by which three-year-old children adjust to kindergarten life. In this paper the case study method is used to verify the ways that children entering kindergarten at the age of three adjust. It has been shown that the teacher provides emotional support to the children in many specific ways and concrete situations. Children who enter kindergarten at the age of three surmount problems by various methods in the process of adjustment.

はじめに

この研究では初めての集団生活の場として幼稚園に3歳児で入園する子どもの姿をとらえ、どのようなプロセスを経て幼稚園という家庭とは異なる場を自分自身のものとし、主体的に他者との関係に入っていくのかを検証することを目的とする。

幼稚園に適應していくプロセスの中では幼稚園に入園する前の3年間をどのような養育環境のもとで過ごしてきたかということが大きな影響を与えていると考えることができるが、入園前の養育環境についてはすでに前回報告⁽¹⁾した。

今回は入園当初の3歳児の姿を観察し記録を取り、事例としてまとめることによって、子どもが幼稚園に適應していくプロセスを明らかにしていくこととする。

Key words; Care and Education of Three-year-olds, Adjustment in the Group, Separation Anxiety, Teacher's Role, Acceptance.

I. 觀察方法

(1) 觀察園について

觀察は大宮市の郊外にある私立M幼稚園で行われた。この幼稚園は子どもたちの主体的な活動である遊びを大切にしている園である。

3歳児は1クラス30名の定員であり、2名の教師が担任として保育にあたっている。

なお、この園では3歳児は特に1人ひとりの發達の個人差が大きいことを考慮し、9月入園という制度を実施している。このため定員30名の内、約半数は4月に入園し残りの約半数は9月に入園してくる。(1998年現在)

幼稚園には徒歩通園の子どもと園バスを利用して登園する子どもがいる。

(2) 觀察方法

觀察方法としては次の2つの方法をとった。

・その1

1996年4月から1997年3月までM幼稚園において、筆者が3歳児クラスの担任として保育を行い、子どもの様子を個人記録と保育日誌という形で記録していった。

・その2

1998年4月11日から7月15日までの月曜日と水曜日の週2回、M幼稚園の3歳児を觀察。登園時から11時30分までの時間帯で行い、觀察記録を取ると共にビデオでも子どもの姿を撮る。また、その都度子どもの変化や保育について担任教師から聴取する。

なお、この年度の9月入園の3歳児はこの時の觀察の対象には含めていない。

II. 適應を左右する要因について

新しい人間関係の場である幼稚園での集団生活に対し、3歳児の子どもたちは特に抵抗を示すことなく適應できる子どもがいる一方で、いままで経験したこともなく、予測することもできない新たな生活に対して不安を強く抱く子どももいる。

そのように子どもを不安にさせてしまう主な要因としては次の3つが考えられる。

(1) 母親との分離不安

(2) 新しい環境に対する子ども自身の認識の不足

(3) 遊びに入るための、あるいは友達とかかわるためのスキルを身につけていないかあるいは未熟である。

3歳児が幼稚園生活に適應するプロセス II

この3つの要因の中で最も影響を与えているのは母親との分離不安であろう。この分離不安の強さや現われ方には個人差が大きく、入園当初は母親と離れることに強い不安を示しても、幼稚園という場が認識できると母親の不在に対しても動揺することなく、短期間で幼稚園での生活に適應していく場合もあれば、入園前の3年間で主な養育者である母親との間に基本的信頼感⁽²⁾を形成することができず、長期に渡って不安な気持ちを抱えたまま幼稚園にいる子どももいる。また分離不安が極度に強い場合は登園拒否に發展することもある。

適應を困難にさせている要因の(2)新しい環境に対する子ども自身の認識の不足と(3)遊びに入るための、あるいは友達とかかわるためのスキルを身につけていないあるいは未熟である、については子どもが誕生してから3年間、家庭を中心に生活してきたということを考えると、むしろ当然のこととして受けとめることができる。

そしてこのケースでは幼稚園の教師が個々の子どもの不安や葛藤を受けとめ、子どもに対して必要とされる援助活動をすることによって、適應へと導く役目を果たすことが求められている。

ここにあげた3つの要因の他にも言葉では言い表せないような不安や葛藤を個々の子どもたちは抱えている。そして1人ひとりの子どもたちがそれぞれに相応しい方法とプロセスを経てそれらの入園時の課題を克服し、幼稚園に適應していくのである。

Ⅲ. 事例と考察

ここでは3歳児から幼稚園に入園した子どもが幼稚園に適應する姿を事例として取り上げ、どのようなプロセスで幼稚園生活に適應していったのかということを検証していく。

なお、プライバシー保護のため、ここで取り上げた事例はすべて仮名にし、場面設定にも多少変更を加えてある。

事例1 母親との分離に不安を示した子ども

A男の場合

- (1) 観察方法はその2による。
- (2) 入園前の養育環境

Y男は4月生まれの男子である。家族は両親と1月に生まれた弟の4人家族である。マンションに住み、同じマンション内には4歳児クラスに在籍する遊び友達の男子もいる。入園前は同じマンションの同年齢の男の子とよく遊び、仲間関係は豊かであった。

- (3) 幼稚園に適應していくプロセス

入園当初は不安な様子もなく、すぐにTという男児と親しくなる。幼稚園には園バスを利用してゐる。4月22日にバスではなく、母親に送られて登園してくるが、クラスの入り口の所までくると

3歳児が幼稚園生活に適應するプロセス II

急に母親にしがみつき、離れようとしなくなる。それ以後、バスに乗ることを拒否し、母親と一緒に登園するようになる。また、母親と別れる際にも大泣きし、クラスに入ることも拒否するようになる。

4月27日（月）

母親と泣きながら離れる。しばらく保育室の入り口から中の様子を眺める。

そのうちに再び大声で泣き始める。教師はしばらくA男の様子を見ていたが、大声で泣き始めると、そばに行き「お母さんにあいたくなっちゃったの？」と声をかける。教師はA男のスモックを出すと、「素敵なおスモックね、ミッキーがたくさんいるね。お母さんが作ってくれたの？」とスモックを着せる。A男は教師からスモックのことをほめられるとすぐに泣きやみ、「これはおばあちゃんがつくったの」と教師に自分から話しかける。そして教師と一緒に遊ぶ。

5月18日（月）

バスに乗って登園してくるが、バスの中から大泣きし、教師に抱きかかえられてクラスにやってくる。クラスの中には入ろうとせずしばらく出入り口のすのこの上に立って過ごす。時々泣きやみ、クラスの中の様子を覗いてみる。しかし、クラスの中には入ろうとしない。教師は出入り口のすのこの上に立っているA男に「粘土する？」と誘いかけるが、A男は黙ったままである。その後、教師はテーブルをA男の前に出し、そこに自動車のパズルを置く。A男は教師が置いていったパズルを見つめるが、自分ではやらない。しかし、他の子どもがやり始めると、「こうだよ」と教え、一緒にやりはじめる。帰りの時間が来てもクラスの中に入ろうとしない姿を見て、教師はA男のそばに行き、みんながクラスの中で一緒にしている手遊びをA男のそばでやってみせる。A男はみんなが手遊びをしているのを、クラスの外からじーっと見つめる。

6月3日（水）

この日もクラスの中には入ろうとせず、出入り口のすのこの上に立っている。

教師がそばに行き、A男に王冠ころがしの王冠をポケットから出してみせる。そして「王冠ころがし、しようか？」と誘う。A男は教師から差し出された王冠を手にし、しばらくその場で教師と一緒に転がして楽しむ。クラスの中には入ろうとしないので、教師は机上積み木をA男が立っているすのこの所までもってくる。しばらくの間、教師と一緒に机上積み木で遊ぶが、A男が1人で机上積み木を組み立てはじめると、教師はその場を離れる。その後、他の男児も加わり、一緒に机上積み木で組み立てたすべり台に王冠を転がして遊ぶ。王冠がクラスの中に転がっていくと、A男は

3歳児が幼稚園生活に適応するプロセス II

あわててクラスの中に入り、取りに行くが、すぐに入出口のすのこの所まで戻る。クラスの中にはけっして入ろうとしない。

A男は6月23日（火曜日）の朝、自分から母親に「すのこに立っていてもつまらない」と話し、それ以後、母親とすっきり離れられるようになったとのことである。（教師からの聴取による）

6月24日（水）

母親と一緒に登園してくる。門を入り、母親と手をつなぎ、元気に歩いてくるが、花壇の前までくると足が止まってしまう。そして自分の保育室の方を眺める。

A男が登園している姿に気づいた教師は、先に登園していた子どもたちに「Aちゃんにおはようって行ってこようかしら」と声をかける。そして2～3人の子どもと一緒にA男の所に行き、おはようと声をかける。A男は教師の手をにぎりおはようと言ってきた子どもたち、そして母親と一緒に花壇を見て歩く。その後すぐに母親と離れ、保育室まで一人で走って行く。身支度を終えるとすぐにTと2人で遊ぶ。

(4) 考 察

入園前に同じマンションの友達と遊んだ経験が豊富であったため、入園してからもTとすぐに仲良くなり、幼稚園で遊ぶことが楽しいA男であったが、入園後一週間たってから、幼稚園に母親がいないことに気づき、不安になり、登園を嫌がるようになってしまった。担任教師の話によると、1月に弟の出産のため、病院に入院し、その間母親と離れていなければならない時期があり、その時の経験から母親と離れることに強い不安を示したのではないかとのことであった。依田⁽³⁾はスムーズな母子分離ができるための条件として子どもが母親に対して信頼感を持っていることをあげ、「この信頼感ができていないと子どもは母親から時間的にも空間的にも、はなれることはできない」と指摘している。

出産のためとは言え長期に渡る母親の不在はA男にとって母親に対する信頼感を喪失してしまうような出来事であった。

幼稚園でのA男の姿を見て、母親はY男の不安な思いがどこからくるのかを察し、A男との基本的な信頼感をつくろうと、A男が満足するまでその気持ちにこたえようとしている。

一方、教師はA男に対し、幼稚園が楽しいところであると感じ取れるような場を作ろうとし、A男が興味や関心を持ちそうな遊びや遊具を準備し、かかわっていることがこの事例から読み取れる。

このような日々を積み重ねていくうちに、A男は同じクラスの友達と遊びたいという気持ちが日増しに強くなっていった。それと同時に、母親に対する信頼感も取り戻していった。その結果、「自分が動き出さなければ幼稚園は楽しくないのだ」ということにA男自身で気づいていったので

ある。

A男が幼稚園に適應するプロセスでは、クラスの友達がA男の気持ちを支えていることにも目を留めるべきである。

事例2 子どもの幼稚園生活に不安を示した母親

B子の場合

- (1) 觀察方法はその3による
- (2) 入園前の養育環境

11月生まれのB子は5月に地方都市から幼稚園の近くに転居してきた。そのため幼稚園に入園したのは6月1日である。家族は両親と7ヶ月(1998年4月現在)の妹の4人家族である。

入園前は下の子に手がかかるため、あまり外にもでず、家の中で過ごすことがほとんどであった。また、引っ越してきて間がないため近所に友達を見つけることができず、母親は早く幼稚園に入園させたいと思っていた。

- (3) 幼稚園に適應するプロセス

6月1日から登園してくるが、B子が母親に「ママも一緒にいて」と言う。母親も教師に「B子が私から離れるのは初めての経験なので心配である。しばらく子どもと一緒に幼稚園についていようか」と相談したため、B子が園の生活に慣れるまで、保育時間中一緒にいることになる。

6月1日(月)

初めての登園である。B子は母親のそばを片時も離れようとはしない。母親が「ままごととして遊ぶ?」と遊びに誘うと、先にままごとコーナーで遊んでいた女兒たちの隅に行き、1人で遊び始める。先に遊んでいた女兒が使っていたおなべを使ってしまい、けんかをする。B子は「やだ、つかうの」と言いながら、相手の顔をひっかいてしまう。

教師は「どうしたの?」と言いながら入ってくる。教師はB子に「これ、使いたいの? でも、いま使っているからね。ほかにおなべあるかどうか探してくるね」と言う。そしてほかのおなべをB子に渡す。B子は教師からおなべを受け取ると、そのまま、ままごとを続ける。けんかをした女兒とはすぐに仲良くなり、一緒に料理を作ったりして遊ぶ。

6月3日(水)

登園後、母親のそばにいる。母親がB子から離れようとする、「だめ」「きて」と自分の隣にくるまで呼ぶ。

3歳児が幼稚園生活に適応するプロセス II

母親が「遊戯室でも行ってきたら」と声をかけると「ママと一緒にいこう」と答え、一緒に行く。遊戯室で見つけた人形を抱えて保育室に戻ってくると、B子は母親と教師、そしてままごとをしている女児の間を行ったり来たりする。

降園前にクラス全員がイスに座るとB子はI子の隣に座ろうとする。しかし先に座っている女児がいたため、けんかになる。B子は「いや、ここがいいの」と泣き、母親のところに戻る。母親は教師に「I子ちゃんの隣に座りたいようなんですが」と訴えに行く。母親とB子のやり取りを見ていた教師はB子に「じゃあ、先生と一緒に場所かわって、て言いにいこう」と言うが、B子は「ママがいい」と泣き続ける。教師は「B子ちゃんが言わないとわからないと思う」と言い、そのまましばらく様子を見る。

B子が落ち着いたところで教師はイスを持ち、先に座っていた女児のところに行き、「B子ちゃんがI子ちゃんのとりに座りたいんだって。この間に1つイスをいれてもいいかな?」と尋ねる。女児は「いいよ」と答えB子は黙って隣にすわる。

B子は母親も自分のイスの後ろに呼び、帰りのしたくも「やって」と頼み、全部母親にしてもらう。

この後、母親と教師が話し合い、翌日から母親は登園後、幼稚園に残らずに帰ることになった。それ以降B子は登園時、母親とさよならをする際少しくずするが母親が帰ってしまうと自分からI子やままごとの仲間の中に入って遊ぶようになる。

(4) 考 察

事例1のA男とは逆に初めての幼稚園生活に対し、母親の方が強い不安を抱いているケースである。その母親の不安な気持ちがB子にも伝わってしまい、そのため、B子も不安になってしまっている。

入園当初、母親はB子と共に園に残ってB子のそばにつき添っていたが、そのことがB子にとってはよい影響を与えなかった。

母親は「ままごとで遊ぼう」とか「外にでよう」と自分の考えをB子に伝えると、B子もそれに応えようとして自分の本当にやってみたい遊びに取り組みず、母親の言うことに従っていた。B子はままごと遊びやI子に興味を持っているものの、母親の目があるため、自分の思いのままに行動できず、いらいらしている様子であった。教師は母親とB子の関係を見て、母親がいないほうがM子が主体的に行動できるのではないかと判断し、母親も幼稚園でのB子の姿を見て、教師のアドバイスに納得し、それに従った。

B子の心には自我が育ちつつあり、自分から新しい世界に入って行こうとしていたが、母親の不安な気持ちがB子の主体的な行動を押えてしまっていた。このプロセスにおいては教師が母と子の関係をしっかりと見つめ、母親に対して「B子は1人でやっていける」とアドバイスしたことがス

ムズな幼稚園生活につながっていったように思う。

依田⁽⁴⁾はB子の母親の例のように、「母親が強い分離不安を抱えている場合は母親自身がその不安を克服することが大切である」と指摘している。

事例3 幼稚園という新しい環境の場に不安を示した子ども

C子の場合

(1) 観察方法はその1による。

(2) 入園前の養育環境

12月生まれの子である。

8階建てマンションの4階に住む。家族構成は会社員の父親と専業主婦の母親、それにC子の3人家族である。同じマンション内には同年代の子どもが多く居住しているが、声をかけられれば一緒に遊ぶという程度のかかりであった。母親も他の母親たちと積極的に交わろうということはない。マンションの近くに公園があるが、そこに行く道路が危険なため、あまり外にも出かけず、母親と2人で室内にいることが多かった。

父親は仕事のため帰宅も遅く、普段はあまりC子と顔を合わせることはないが、週末は1日中、父親と一緒に遊んで過ごしている。生活習慣はほとんど自立しているが、排泄に関しては、時々トイレに行くよう促さないと、漏らしてしまうこともあった。

家は園からは車で5分ほどの距離であるが、通園バスを利用した登降園である。

(3) 幼稚園に適應するプロセス

4月11日(木)の入園式には両親と一緒に参加する。父親や母親と離れていても特に不安がることもない。降園前に母親と一緒に自分のロッカーの場所を確認していく。

4月12日(金)

初めて通園バスに乗って登園してくる。バスに乗る際、母親に「行ってきます」と言い、別れる。バスの席で隣になった5歳児の女の子A子に手を引かれてクラスまでやってくる。

担任教師が「おはよう」と声をかけると「おはよう」と返事をする。教師が「C子ちゃんのくつ箱どこだっけ」と問いかけると首を横に傾げる。教師が「一緒にさがそう」とC子の手を取り探す。C子のシール(名前の代わりに目印となるもの)を見つけると、教師はC子のシールを指さしながら「C子ちゃんはリスのシールだね」と伝える。

その後、教師はC子と共に「リスのシールはどこだ?」とロッカーの場所を探す。探し出すと「ここだ。リスのシールが貼ってあるからC子ちゃんのロッカーだよ」と確認する。教師と一緒に身支度を終えると、C子はそのまま自分のロッカーに入り込んで回りの様子を見る。

4月13日(土)

バスで隣に座っている5歳児女児A子に手を引いてもらい、クラスまで一緒にやってくる。A子が行ってしまうと自分のクラスの中を眺めるが、中に入ろうとはしない。教師が「C子ちゃん、おはよう」と声をかけると「おはよう」と返事をする。教師が「C子ちゃんのくつ箱、どこだっけ?」と問いかけると表情が硬くなる。「リスのシールを探そう」と教師はC子に声をかけ、くつ箱とロッカーと一緒に探し、身支度も教師が方法を伝えながら取り組む。

その後は自分のロッカーの中に入り込み、クラス内の様子を見て過ごす。

4月15日(月)

通園バスを降りるとA子と一緒にクラスまでくる。A子は「C子ちゃんのくつ箱はどこ?」とC子に尋ねると、C子は「リス」と返事をし、A子と一緒に探し、くつを履きかえる。その後、C子の姿が見えなくなる。担任教師が園内を探すと、隣の4歳児クラスの床にリュックサックを背負ったまま座り込んでいる。教師に名前を呼ばれると教師に気づき、教師と一緒に自分のクラスに戻り、教師と一緒に自分のロッカーを探し、身支度をする。その後、教師に誘われて小麦粉粘土をして遊ぶ。

4月19日(金)

A子と一緒にクラスまでやってくる。A子は「C子ちゃんのくつ箱はここだよ」と指さして教えてからA子は自分のクラスに行く。C子はシールを見ながら自分のロッカーを探し、身支度を始める。しばらく経ってから教師がC子の様子を見ると、C子はリュックサックの中の荷物を全部だしたまま、床に座り込んでいた。教師が「一緒に支度しようか?」と声をかけると「うん」と返事をする。身支度を終えた後は自分から「あれ、したい」と小麦粉粘土を指差し、遊ぶ。

4月22日(月)

登園後、教師と一緒に身支度をする。教師が身支度を手伝う時に「タオルはどこにかけるんだっけ」「コップはどこに置くの?」と問いかけると「ここにかけるの」と一人です。1つ1つ、教師に「これでいいの?」と同意を求めている。

身支度を終わると小麦粉粘土で遊ぶ。隣で遊んでいた同じ3歳児のE子と作ったものを見せ合い、お互いに声を出して笑う。

3歳児が幼稚園生活に適應するプロセス II

4月23日（火）

登園後、教師と一緒に身支度をしているとE子がそばにやってくる。支度が終わるとE子はC子と一緒に小麦粉粘土で遊ぶ。その後、教師が「こいのぼりを見に行こう」と子どもたちに声をかけるとE子とC子は2人で外に出ていく。そのまま2人は降園まで外で遊ぶ。

4月30日（火）

E子が身支度を終わるとC子のそばに行き、C子の身支度をしている様子を見る。C子がまだ終わっていないのに気づくと、「手伝ってあげる」とC子の身支度を助ける。その後2人は一緒に空き箱を使った製作をして遊ぶ。

30日（火）に母親から「C子は1人でトイレに行っているのでしょうか？ 幼稚園から帰ってくるたびにすぐにトイレに駆け込んでいます。パンツが濡れていることも多くあります。行きたくても1人で行けない様子でしたら、トイレに行くように声をかけてください」と連絡帳にて相談があった。

5月1日（火）

登園後、E子と一緒に身支度をし、身支度を終わると2人でままごと遊びの仲間に入る。片付けの時間の前に教師が「C子ちゃん、おしっこは？」と尋ねる。C子はすぐに「でないよ」と返事をする。片付けを終わると教師はクラスの子どもたち全員に「トイレに行ってみよう」と誘う。C子も一緒にトイレに行くが、和式の便器をみたたん「できない」と不安な表情になる。この日はトイレを見ただけで、排泄せずに降園する。

5月2日（木）

登園後、E子と一緒に身支度をし、終わると2人で遊戯室にいつてままごと遊びをする。片付け後にC子に「トイレに行こうよ」と教師は声をかける。トイレに行くと和式便器を見、「できない」と言う。教師は「先生が支えていてあげるよ」というとC子は教師にしがみつきのながらもしゃがみ、排泄する。排泄し終わると、教師はC子に「おしっこする時、先生が助けてあげるからしたくなったらがまんしないで一緒に行こうね」と話す。C子は「うん」と返事をする。

5月7日(火)

登園後、E子やS子がC子のそばにやってくる。C子が身支度をするのを手伝う。その後3人で製作のテーブルに行き、はさみで紙を切って遊ぶ。片付けの後に教師が「トイレに行く？」と声をかけると「うん」と答え、一緒に行き教師に支えられて排泄する。降園時、教師がイスを円形に並べていると「Cちゃんもする」と手伝ってくれる。

5月10日(金)

登園するとE子やS子はすでに庭で遊んでいたため、1人で身支度をする。その後、自分から庭に出て、E子たちの仲間に入って遊ぶ。

片付け後、いつものように教師が「トイレに行く？」と声をかけるが、「1人でできる」と1人で排泄をしてくる。

(3) 考 察

C子は幼稚園に入園する前は母親と共に過ごす時間が多く、同年齢の友達とかかわる経験も多いほうではなかった。しかし母親と別れて幼稚園にいるということに対しては不安を示してはいない。C子を不安な気持ちにさせたのは自分のロッカーの場所が分からない、園の勝手がわからずトイレに行けない、またどのように身支度をしたらよいのか理解できていないということであった。小川は「幼児の生活習慣上の自立は、幼児が生活している保育室や園内の空間を自力で自由に行動できること、つまり、園の勝手がわかることによって達成される」⁽⁵⁾と述べ、「幼児が生活する園内の空間を知り、自力で自由に行動することができるようになることによって、はじめて保育集団の生活に入ることができる」と指摘している。

C子にとって幼稚園での生活の方法やどこになるのかという生活空間を知ることは主体的な園生活を送るために重要なことであった。特に排泄に関してあまり自信のないC子にとって、トイレに自由に行くことができないことは不安を募らせる要因となっていた。

母親からトイレについての指摘を受けた教師はC子にトイレの場所と和式便器の使い方を伝えていく。また、クラスの中でもC子を助けてくれるE子と知り合ったということはC子の気持ちを前向きにしていった。

5月10日にトイレに1で行けたことは「もう、わたしは大丈夫」というC子の気持ちの現れであり、幼稚園での生活に不安がなくなったことを意味している行動である。

事例4 入園前同年齢の子どもとかかわる機会の少なかった子ども

D男の場合

- (1) 觀察方法はその1による
- (2) 入園前の養育環境

D男は10月生まれの男児。会社員である父親と専業主婦である母親、それに小学校に通う3歳違いの姉との4人家族である。

住居は大規模な12階建ての集合住宅の11階にある。マンションの敷地内には大きな公園があるが、外出するためにはエレベーターを使用しなければならず、母親や姉と一緒にの時だけ、公園に行くことができる。連れ出す人がいない場合は室内で1日を過ごしていた。そのためマンション内には同年齢の子どもがたくさん居住しているにもかかわらず、一緒に関わって遊ぶという経験は少ない。姉が英会話教室に通っているため、D男も2歳から英会話の2歳児クラスに参加している。通園には園バスを使用している。

- (3) 幼稚園に適應するプロセス

9月入園のため、幼稚園には9月6日（金）より登園してくる。

9月6日（金）

2学期の始業日であり、D男にとっては初めての幼稚園である。この日は母親と共に登園し、始業式に参加。始業式のみで遊ぶ時間がなかったことが不満で母親にあたり、ぐずる。

9月7日（土）

バスに乗ることがうれしい様子であり、母親とスムーズに別れ、喜んで登園して来る。バスから降りると、5歳児の男児と一緒に手をつなごうとするが、その手を振りほども、駐車場より1人で走って来る。園庭までやってくるとシャボン玉作りをしているテーブルに行き、リュックサックを背負ったまま園庭で遊び始める。帰りの時間まで外で遊び、この日はクラスには入らず、身支度もせずに降園となる。降園する際、「帰りたくない」としばらく泣く。

9月9日（月）

バスから降りると、手をつなごうとする5歳児男児の手を振りほども、1人で走って来る。1人で上履きに履き替えるとすぐ側に立っていた男児F男の顔を覗き込む。F男と視線が合うとF男の頭を叩く。K男はF男の様子を見ながら走ろうとするが、F男が泣き出したため、驚いてそのまま走って行ってしまふ。その後幼稚園内を走り回って過ごす。

3歳児が幼稚園生活に適應するプロセス II

9月10日（火）

保育者と一緒に初めて身支度を行う。身支度をしながらも、視線は小麦粉粘土に注がれ、身支度後、すぐに触れ、丸めたり伸ばしたりして感触を楽しむ。

降園時、園庭に出してあった自転車を見つけると「のる」「のりたい」と泣いて教師に訴える。

教師が「もう家に帰る時間でお母さんも待ってるよ。明日朝来たらすぐにのれるようにだしておくね」と伝えても全く聞こうとしない。しばらくそのままにし、「バスがでるから行くね」と教師が歩き始めると急いで後を追ってくる。教師が抱き上げると、そのまま抱かれてバスに乗り、降園する。

9月13日（金）

教師と身支度をするが、小麦粉粘土が気に入り、何回も手に取って触る。身支度後は1人で遊戯室に行き、大型箱積木を横に並べて遊ぶ。片付けの時間がきても「まだ遊ぶ」と続ける。しばらく遊ぶと4、5歳児が片付けを始める。するとD男も一緒になり積み木を運ぶ。クラスには他の3歳児が帰りの支度を終えた頃、戻ってくる。

この日以降、朝、身支度を終わると遊戯室に行き、1人で積み木遊びを続ける。降園時間になっても「まだする」と遊び続け、他の3歳児が帰り始めるころ、降園の支度を始めるという日が続く。

9月21日（土）

この日は9月の誕生日会をする。

誕生日会後のおやつにはクッキーとぶどうが出る。クッキーは食べるが、ぶどうは1つ舐めただけで「いらぬ」と食べずに終える。帰る仕度をした後、「まだ遊んでないよ」と泣いてぐずる。他の3歳児が帰ってしまうと泣きまねをしながら教師の顔を覗き込む。教師が「バスにのろうか」と声をかけると首を縦にふり、バスに乗りに行く。

9月24日（火）

初めて1人で身支度をする。身支度後「1人でできたんだ」と教師が声をかけると走って遊戯室に行ってしまう。

片付けが終わる頃、遊戯室から戻り、みんなと一緒に絵本を見る。

降園時、クラスの子どもたちが円形に並べられたイスに座っているとK男は円の中に行き、座っ

3歳児が幼稚園生活に適応するプロセス II

ている子どもの頭を順番に笑いながら叩いて歩く。

10月4日（金）

ビニール袋にどんぐりをたくさん入れて持ってくる。身支度を終わると、クラスの友だちに「ほら、どんぐりだよ」といって見せる。それをみた他の子どもたちは「いいな」「欲しいなあ」という言葉を口にする。その声に気づいたD男は「いいよ」と言い、1つずつ配っていく。みんなから「ありがとうD男ちゃん」と言われ、D男はうれしそうな表情をする。

10月7日（月）

登園してくるとすぐに「公園でどんぐりを拾ってきた」とみんなに見せ、配って歩く。身支度を終わると製作をはじめ。牛乳パックに長い紐を付け、それを自動車のようにして引いてあるく。それを見ていた他の子どもが「Dちゃんみたいなの、作りたい」と教師に言ってくる。D男は作り終わると遊戯室に行ってしまう。

降園前に教師が絵本を読む。D男は床に座っている子どもたちを踏みつけて前に出てくる。踏みつけられた子どもが泣くと、困った表情をして教師の顔を見つめる。

10月21日（月）

小麦粉粘土で遊ぶ。S男の隣に座り、やり始めるが、「もっと、もっと」とS男が使っていた小麦粉粘土を取ってしまい、けんかになる。S男が取り返そうとすると、D男は自分の手にした小麦粉粘土の上うつ伏せになって取られないようにする。S男が怒って他の遊びに移ってしまうと、D男は再び粘土で遊び始める。

10月24日（木）

朝から、「A子ちゃん、A子ちゃん」とA子の名前を呼び、一緒に遊ぼうとする。

A子がハサミで紙を切ったり、箱製作をして遊んでいる側に座り、同じ事をして過ごす。

10月25日（金）

登園後すぐに「A子ちゃん、お母さんごっこしよう」と誘う。A子は「いいよ」と答え一緒に遊

3歳児が幼稚園生活に適應するプロセス II

ぶ。

降園時、帰る仕度を先に終えたD男は、A子の仕度を手伝う。みんなであつまる時もA子の隣りに座わる。

帰りも「A子ちゃんと手をつなぎたい」と泣いて教師に訴えてくる。A子は特に嫌がることもなく、D男と手をつないで帰る。

10月30日（水）

朝から同じ通園バスで通ってくるA子と手をつないで登園して来る。

降園時、バス通園の子どもがバスに乗るために並んで待っていると「1番に並べなかった」と泣く。しばらく泣いていると、今度は教師に「おんぶ」「だっこ」と要求してくる。D男は教師に背負られると満足したように泣きやみ、教師の背中にしがみつきのままバスに乗る。

11月5日（火）

朝、A子が身支度を終えるまで側で待っている。A子が始めると一緒に製作をし、クレヨン画を始めると、D男も同じようにクレヨン画をA子の隣りで始める。お弁当もA子と一緒に食べる。

11月11日（月）

A子と一緒に身支度をする。身支度が終わるとままごとのコーナーに行き、2人で遊ぶ。その後、クラスにある子どもの椅子をA子と2人で全部縦に並べる。並べ終わるとD男は「座わっていよ。」とクラス内にいた友達に声をかける。

その後、毎日D男はA子が身支度を終える時まで待ち、A子と降園まで一緒に過ごすようになる。A子の身支度や着替えなどを手伝う姿も多くなって来る。

12月12日（木）

A子と手をつないで登園してくる。身支度を終わると「A子ちゃん、積み木でお家作ろうよ。」と言って、積み木遊びに誘う。自分と同じものをA子にも作ってほしいようであり、A子が違うことをしようとする「A子ちゃん、ダメ！ こうやるんだよ。」とD男は言う。

降園前にクラス全員が集まった時、D男はみんなが座ってしまった後にクラスに帰って来る。A子の隣りに座りたかったD男はA子の前に行き、A子の手をとって無言で引っ張る。A子はそのまま

ま動かずにいたが、D男は泣き出し、「A子ちゃんの隣りに座りたい」と大声で言う。

教師はD男に泣いていても座われないことを伝え、「A子ちゃんの隣りに座わっている友達に席をかわってもらえるか聞いてみたら?」と、方法を伝える。D男は泣き止むとA子のとなりに座っていたS子の前に行く。D男は言葉がなかなかでない様子であったが、小さな声でS子に「かわって」と自分の気持ちを言葉で伝える。S子は「いいよ、D男ちゃんはA子ちゃんが大好きだもんね」と言って席をかわる。D男は顔を伏せたまま再び小さな声で「ありがとう」と言う。

(4) 考察

高層マンションに住み、同年齢の子どもとのかかわりもあまりなかったD男は入園前に好んでいた遊びはビデオであり、英語のカセットテープであった。

D男は入園当初、自分の思う様に行動できることがうれしく、目に映ったものすべてに興味を示し、幼稚園中を走りまわっていた。

自分がやりたいと思ったことに対しては友達が先にしても、その姿が目に入ることはなく、一直線に飛び込んでいく。そして遊びをとられた友達の泣き声が聞こえる度に、そこに人がいたことに気づくというような日々であった。友達とのかかわり方を知らないD男は他児から見ると「叩く子」であり恐い存在であったようである。

9月の後半になると幼稚園での生活パターンに気づき、身支度や片付けなど自分でしなければならぬことにも取り組むようになる。

友達にも興味が出てくる。10月4日にはいままで同じクラスの友達とはあまりかわらなかつたD男が家庭から持ってきたどんぐりをみんなに配る。この行為はD男が主体的に他者とかわらうとする気持ちの芽生えであると考えることができる。

10月中旬頃からD男はA子に興味を持ち、自分から積極的にかかわりを持つようになる。穏やかな性格のD子はK男の思いをやさしく包みこみ、それによってK男の気持ちも落ち着いてきた。

D男の場合、A子に対する信頼関係が形成されたことによって、幼稚園生活のスキルをA子とのかかわりの中で身につけている。

特に入園前に友達とのかかわりが希薄であったD男はA子をモデルとして、他者とのかかわり方を学んでいるのである。

事例5 仲間関係が豊かな中で育った子ども

G夫の場合

- (1) 観察方法はその1による
- (2) 入園前の養育環境

G夫は1月生まれの男児である。教師である父親と専業主婦の母親との3人家族である。住まい

3歳児が幼稚園生活に適應するプロセス II

は住宅地の中にある2階建ての賃貸アパートの2階に住む。アパートの隣りに公園があり、雨の日以外は毎日公園に行って遊んでいる。公園で知り合った同年齢の友達も多く、仲間関係は豊かであった。

幼稚園は車で10分ほどの距離にあり、通園バスを利用している。

(3) 幼稚園に適應するプロセス

4月11日(木)

入園式には両親と共に参加。特に緊張している様子は見られず、表情も和やかであった。式の終わった後、クラスに入ると教師に「遊んでいいの?」と尋ねてくる。「明日幼稚園に来たらたくさん遊べるよ。何して遊びたい?」と教師が問いかけると「ブロック」と答える。

4月12日(金)

初めて母親と離れてバスにて登園してくる。

母親とは「いってくるね」と手を振って別れる。クラスにはバスの中で隣の席に座っていた5歳児男児に手を引かれてやってくる。教師と一緒に身支度を終わるとクラスの中に置いてあった汽車セットを見つけ、教師に「あれやりたい」と言ってくる。この日は帰る時まで1人で汽車セットで遊ぶ。

4月13日(土)

バスから降りて昨日と同じように5歳児男児に手を引かれてクラスまでやってくる。クラスに入る時、手をつないでくれた5歳児にむかって「バイバイ」と手を振る。

教師と一緒に身支度を終わるとブロックで遊ぶ。

テーブルの上で小麦粉粘土をして遊んでいる子どもを見て教師に「あれやってみたい」と言ってくる。教師は「いれてって言って仲間に入れてもらおうか」と話しかけると「うん」と答え、教師と一緒に仲間に入る。G夫は「おもしろいね」と他の子どもと話しながら小麦粉粘土で遊ぶ。

4月19日(金)

登園後、身支度は時間がかかるがすべて1人です。身支度を終わるとすぐに外に遊びに出る。砂場で5歳児男児数人が川を作り、その中にバケツで水を汲んできて流しているのを黙って見つめる。5歳児男児たちが遊んでいる隣りに坐り1人で砂をつかみ、山を作る。作りながらも5歳児の

3歳児が幼稚園生活に適應するプロセス II

川作りの様子を時々見つめる。片付けの時間が来ても遊びを止めようとはせず、黙々と遊ぶ。教師が帰ると再び声をかけるが「まだ遊びたい」と降園時間まで遊ぶ。

4月20日（土）

登園するなり「砂遊びする」と教師に言ってくる。すぐに砂場に行き、穴を掘ってはバケツに水を汲んできて自分で掘った穴の中に流し込む。帰りの時間がきても「まだ遊ぶ」と昨日と同様、降園時間まで熱中して遊ぶ。帰りのバスの中では「楽しかったね」と隣りに坐っている子どもに話しかける。

(4) 考 察

事例7は入園前の仲間関係が豊かな中で育っていた例である。

事例7のG夫は1人っ子である。「1人っ子は兄弟関係がなく友達との間につくらなくてはならないヨコの関係は幼稚園、保育園に行くようになってから初めて経験するものであり、兄弟を持っている子どもと比べると不利な立場にある」と言われている⁽⁶⁾。

しかし、G夫の両親はこのような一人っ子の特徴をよく理解し、G夫が友達とかかわれる環境を作っていた。幸いにも住居の隣りが公園であり、そこに毎日行くことによって多くの仲間と出会い、他者とかかわり方のスキルを学んでいたのである。

そのような体験が幼稚園生活に適應する際に、幼稚園の環境に積極的にかかわっていきこうとする力になっている。

意欲はあっても初めてのことに対してはその意欲を支えるものが必要となってくる。ここでは教師がG夫の興味と現実の遊び場面とをつなぐ橋渡しの役割を果たしていることに目を留める必要がある。

IV. 適應を支えるための教師の役割

ここに取り上げた事例から3歳児が入園当初の不安や葛藤をそれぞれの方法で乗り越えている姿を概観した。そして3歳児が新しい幼稚園という生活の場に適應しようとする時、教師の存在が大きく関与していることも見て取れる。

教師のしている援助活動は、3歳児が幼稚園生活に適應するプロセスにおいて、家庭と幼稚園とを、子どもと遊びを、子どもと仲間を結ぶという、橋渡しの役割を担っているといえる。しかし、そのような援助をするために、教師と1人ひとりの子どもとの間に信頼関係を築くことが前提となっていることは言うまでもないことである。

3歳児が幼稚園生活に適應するプロセス II

子どもたちの新しい生活の場である幼稚園の教師が、個々の子どもの不安や意欲を受けとめ、それぞれにふさわしい援助活動をしていくことが、子どもの幼稚園生活の適應を支えることになるのである。そのために教師には1人ひとりの子どもの心の中にある、小さな訴えに気づく感性と、その子どもに相應しい幼稚園での安定の場を子どもと共に模索していくこと、そして子どもの心が自ら動こうとする時がやってくるまで待つことが求められているのである。そして子ども自身が「幼稚園は楽しい所」と感じられるようになったその時こそ「幼稚園生活に適應した」と言えるのであり、子ども自身が主体的に幼稚園の環境に働きかけるような幼稚園生活がスタートするのである。

注

- (1) 相川徳孝「3歳児が幼稚園生活に適應するプロセス I」聖学院大学論叢 第12巻 第2号 2000年, p. 1~23
- (2) エリクソンは人間の発達を8つの段階に分け、各段階において克服すべき発達課題があり、それを克服することによって健全なパーソナリティーが発達していくと述べている。その最初の段階（誕生から1歳半頃まで）は「基本的信頼と不信」であり、ここでの課題は基本的信頼感を獲得し、基本的不信感を克服することにある。人間関係の始まりである主たる養育者との関係の中で、基本的信頼感を獲得することができれば、人間的に成長する基礎を身につけたことになり、適切な人間関係をつくっていくことができるのであると主張している。
E. H. エリクソン 仁梨弥生訳「幼児期と社会 I」みすず書房, 1977
- (3) 依田 明「3歳児」朱鷺書房 1979, p. 16
- (4) 同上, p. 15~16
- (5) 小川博久「保育実践に学ぶ」建帛社 1988, p. 217
- (6) 依田 明「ひとりっ子・すえっ子」大日本図書 1967, p. 141~142

参考文献

- (1) 吉村真理子「3歳児の保育」ミネルバ書房, 1999
- (2) 小田 豊・神長美津子「3歳児保育のヒミツ」ひかりのくに, 1997
- (3) 根ヶ山光一・鈴木晶夫「子別れの心理学」福村出版, 1995
- (4) 繁多 繁「愛着の発達」大日本図書, 1997